

徴・内耳の数といった土製内耳鍋についての諸属性を比較し、分類について検討した。まず、従来から指摘されている出土地域に対応する三つの分類であるが、器形の特徴の違いを検討することによって、このような分類が概ね妥当であることを確認することができた。分布範囲については若干の修正ができるが、大枠は変更の必要がない。またこのような分布範囲の年代による顕著な変化も見られない。

次に器形以外の属性について検討する。

胎土は基本的に出土地域の在地のものを使用している。胎土分析資料が少なく全てにわたる詳細な検討はできなかったが、器形の特徴による分類にくらべて細かな地域区分が可能だと考えられる。焼成方法には酸化焰焼成と還元焰焼成の二種類があるが、常陸・下総・下野では前者が多く、それ以外の地域では後者が多いという傾向を見ることが出来る。概ね器形による分類に対応しているといえるが、一方で常陸・下総・下野においても還元焰焼成されている地域

もあるなど、器形分類と一致しない例も確認された。これ以外にも法量や内耳の数などいくつかの属性について検討を行なった結果、器形分類により設定された地域内にも多様性が存在していることがわかった。土製内耳鍋が出土するすべての地域においてこれら個々の事例を比較して明確な小地域を設定することはできなかったが、とくに房総地域などでは器形による分類とは異なる小区分の存在を明らかにすることができた。

器形以外の属性に注目することによって、従来の分布圏内においてさらに詳細な地域区分が可能であることを指摘した。次にそれぞれの分類が持つ意味について考えてみたい。前者は広い範囲に共通する製作技術を反映していると考えられる。この点についてさらに考察を深めるには、播鉢などの在地生産品や文献史学の研究成果などとの比較が必要である。後者は多様な様相を示しており、例えば生産地（窯）を表していると考えられることもできるだろう。生産

地遺跡はほとんど確認されておらず不明な点が多い。今回の分析結果は、生産地に対応するような流通範囲を考える手がかりとなる。また、資料分析過程において、茨城県出土資料から共通の簡記号を有するものを複数確認することができた。生産地と流通範囲を考える資料として興味深い。生産地の問題を考えるにあたり、このような点も考慮しながら引き続き分析を行なっていきたい。

相模川東岸における弥生・古墳の画期

中山 喬 央

相模川の東岸地域には弥生時代後期前半の半ば頃、西遠江、東三河方面の人達が大量に移住してきたという事実があり、その人達がどのようにして、この地域で古墳時代の社会を作っていたのかということを知りたいというのが、本論の目的である。

まず出土土器の検討につき地域間編年の整合を行ったうえ、該期を七期に区分し、弥生と古墳の画期をⅣ期とⅤ期の間とした。これは濃尾平野における、廻間Ⅰ式期（欠山式）とⅡ式期（元屋敷式）の動きに連動するものである。次いで実測高坏七点をピックアップしてその継続性を立証し、当地域と西遠江・東三河地域との弥生後期交流の継続性を現した。

更に海老名本郷遺跡での住居址一括出土土器の検討を行った結果、当初は、西遠江系の土器が多いが、駿河系もあれば東京湾岸系もある。そのうちに菊川式の流れを汲む、志太平野のものの影響まで出てくる。濃尾平野の土器が入ってくるのが古墳時代の始まりであり、その在地化が進むと共に、最終のⅦ期には畿内とか北陸のような遠隔地のものまで入ってくるということが判明した。

次いでこの土器編年を基として、切り合い・形態・主軸方向・床直出土遺物等から海老名本郷遺跡住居址四二八軒、方形周溝

墓五〇基について時期別区分を実施、住居址三二九軒と方形周溝墓四二基（内半分の二一基は二期にまたがっている）の、該当する時期を確定した。その結果により算出された方形周溝墓一基あたりの住居址数は、弥生の後期は増減があるものの、古墳時代に入るや、Ⅴ期四・三、Ⅵ期九・五、Ⅶ期三〇・〇と激増する。これは社会の複合化、階層化の進展を表すものであると判断される。

玉作りにについての検討であるが、寺村光晴により海老名本郷遺跡は、本郷技法のタイプサイトにて、下総の大竹技法、北関東の烏山技法とは異なり、管玉は、古墳時代初頭の時代に作られるものではなく、第二段階に属するもので、石釧・車輪石・玉杖の杖身及び鍬の未製品と思われるものが出土していると考えられている。一方、小林行雄は、鍬形石・石釧・車輪石の三者は、何れも弥生時代に腕輪として用いられた貝輪を原型とするが、古墳時代から碧玉を材料として作られ始め、宝器的性格の強いものに

代わったと述べ、更に古墳の副葬品には、古い型と新しい型があるが、碧玉製腕飾り類の製作配布は新しい型の文化活動の一樣相で、その中枢には、それらの器物の生産に必要な機構が成立していたとしている。

又石川県においても、玉作遺跡における大きな動きが弥生後期後半において発生しており、これについて安英樹は、製作流通を支配するリーダーの出現を考えている。

小銅鐸は、住居址・墓坑等からの出土例が多く、個人所有の祭祀関係遺物と思われるが、海老名本郷遺跡出土のものは、佐原真の言う、銅鐸型銅製品であり、鈕の断面形が菱環を呈し、鰭がつかず、鐸身の横断面が扁平になる型式のもので、松井一明は、分布域が伊勢湾・南関東に限定されるものであると述べている。又、馬淵久夫と平尾良光は、鉛同位体比の検定結果から、近畿式・三遠式銅鐸と同じ範囲に入る、前漢時代・弥生時代仿製鏡時代のもので、本資料は、弥生時代末期に作られ、古墳時代まで伝世したものと、推定している。

後円部径四〇mで前方後円墳と目される、秋葉山三号墳出土の壺形土器は、三世紀代のものであるが、静岡県清水市、神明山古墳も「撥形前方部」を持つ箸墓古墳と同形で、四分の一の規模を持ち、出土した土器からも、古墳時代初頭に遡る可能性の高いものであると静岡大学で発表している。

以上の事柄から、相模川東岸域では、弥生後期は西遠江方面と交流を保つが、拠点集落・海老名本郷遺跡においては、Ⅵ期に小銅鐸による祭祀を廃止し、Ⅶ期にはリーダーが出現して玉作りを始め、畿内・北陸方面まで、交易圏を拡大する。又それは、より大きな力をリーダーにもたらし、当該地域における支配圏確立に寄与する。その結果が海老名本郷遺跡の七km北にある秋葉山三号墳として表われるという、蓋然性がもたらされた。

この論旨を更に進める為に、相模川西岸域における該期の集落動向に付、今後検討を進めることと致したい。

アンデス先住民諸社会の世界観 ―岩をめぐる意味の相関―

森 下 壽 典

十五世紀から十六世紀にかけて、南米アンデス地域では、インカ帝国と呼ばれる政体が大なる勢力を持っていた。その首都クスコ周辺には、マチュピチュをはじめ、インカによってつくられた精緻な石組みが今も残り、多くの観光客を集めている。しかし、インカ時代、石や岩は単なる建築材ではなかった。遺跡には壁以外にも多くの岩が意味を持って配され、その一部は何らかの目的のため、人為的に段々やジグザグ状の水路、動物の彫刻などが「加工」されている。それは、インカ帝国において、岩や石が彼らの世界観を表現するものであったからである。

発表者は、アンデス地域における先住民諸社会の世界観を歴史的に検討するためのひとつのステップとして、人為的な「加

工」によってインカ時代に意味を有していたことが明らかな「加工された岩や石」を通じて、インカ帝国が持っていた世界観の一面を描こうとしてきた。その際、遺跡に残る「加工された岩や石」をみただけでは、そこに付与された意味はなかなか明らかになってこない。文字を持たなかったインカ帝国ではあるが、幸いにして、スペイン人による征服後にスペイン語で書かれた多くの記録が残っている。しかし、その多くは、あくまで征服者の、ヨーロッパからの視点で書かれたものであり、扱う地域も時代も多岐に渡っているために、記録に窺える岩や石に付与された意味は複雑で錯綜している。

そこで、発表者は、この錯綜した意味を整理し、検討を容易にする理解の枠組みとして、フランスの歴史家、ロジェ・シャルティエの考え方を援用することを提起する。シャルティエは、たとえば『書物の秩序』などの中で、読書というプラチック（日常実践）においては、静的で抽象化